

# 名大医学部学友時報 2024 2

目次	
1. 瑞宝重光章を受章して	大島 伸一 .....(2)
2. 懐かしき日々	榎本 篤 .....(3)
	川嶋 啓揮 .....(4)
3. YLP 医療行政修士コースの20周年記念について	伊藤 勝基 .....(5)
4. 随筆	西村 哲夫 .....(6)
5. 会員寄稿	櫻井 武 .....(8)
	石川 清 .....(10)
6. 支部だより	静岡県支部総会 .....(11)
	岐阜県支部総会
7. クラス会だより 昭和38年卒会	.....(12)
	NA58会
8. 学友会活動補助費の紹介 一学友会年度会計の概要一	大野 欽司.....(13)
9. 医学部史料館 見学のお誘い	
10. 学友会 e-mail アカウント (med メール)	
	ご利用の会員の皆様へ2つの重要なお願い .....(14)
11. 第5回名大ネットワークキャリアセミナー オンライン	.....(15)
12. 学友会年会費ご請求につきまして	.....(16)
13. 住所変更・勤務先変更のご提出のお願い	
14. 編集後記	



第118回医師国家試験 出発の様子

# 瑞宝重光章を受章して

国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 名誉総長

おおしま しんいち  
大島 伸一



令和5年秋の叙勲で瑞宝重光章を授与されることが決まり、11月8日に皇居に行き、松の間で岸田内閣総理大臣から勲章と勲記をいただきました。

## 秋晴れの坂下門へ別の世界は

有無を言はせぬ礼としきたり

次いで、豊明殿へと場所を変え、天皇陛下よりお祝いの言葉をいただいたあと、正月に参賀の行われる庭で記念撮影という流れで伝達式が進みました。

## 新年はこの庭からかうち並び

叙勲記念のカメラに向かう

私は、安保闘争の余韻が残っていた1970（昭和45）年の卒業です。学内では小児科の教授選考の不正を巡って、学生会や教職員組合が教授会を詰問し大荒れに荒れていました。問題は長引き、欠員の教授ポストは決まらないままというような状態が続いていました。私は単位さえとればよい、といういい加減な学生生活を送っていましたが、卒業後は腎移植をやろうと泌尿器科を専攻し、良い臨床医を目指し医療に取り組もうと決意しました。中京病院の太田裕祥先生（元院長・故人）は腎移植を行うための環境の整備、クリーブランドクリニックへの留学等を許可して下さい、岩月舜三郎先生（元ピッツバーグ大学外科教授・故人）には、移植医療のいろはから学び、やった事は必ず論文にせよとたたき込まれました。中京病院時代の二十六年間は診療に没頭し、約400編の論文を上梓しました。

1997（平成9）年51歳の時に泌尿器科教授に推挙され受諾いたしました。赴任して三、四年経った頃から、国立大学の法人化問題が持ち上がり教授会はこの問題で議論が沸騰しました。当時の齋藤英彦病院長（第一内科教授）は副院長制を提案し、二村雄次教授（第一外科）と私を副院長に指名されました。この人事が私のその後の人生を決定したと思っています。その後、二村病院長の後を受け病院長に選任され、病院改革を進めている2003年末に、国立長寿医療センター（当時）の設立に合わせ、初代の総長として赴任するように要請を受け、翌2004年3月長寿医療センター発足と同時に赴任いたしました。泌尿器科の教授としては忸怩たるものがありました。センターでは退任までの10年間、管理者として高齢者医療の確立と普及に尽力しました。振り返ってみれば、他には例のない変わった医師人生を歩いてき

たものだと思います。

叙勲の推薦は長寿医療研究センターが行います。私のこれまで行ってきたことの全体を把握しているのは唯一、名大時代から秘書を務めてきた久野さんだけです。私とその作業を見ながら、こんな面倒くさいことならもうどうでもいいよというような発言をすると強い反論を食らいました。「一人で戴ける勲章じゃないでしょう。どれほどの人が先生の仕事を助けてきたことか」

## いかほどの人や家族の血と汗が

よくよくそれを父は思へよ

私は医師となって以来、真面目に業務に取り組んできたと自負しています。患者のため病院のため大学のためセンターのため国のためと考えるまでもなく、どんな業務も一人でできるようなものではありません。そんなことはよく解っていたつもりでしたが…。

## ためためとために生かされ吾が道を

老みくれて知るひとりよがり

非日常の極みともいうべき医療という場で生きがいを持って生きたことに悔いはない。ただ78歳にもなって、それがどれほど自分勝手なことだったのかということに気づかされるという不甲斐なさに唖然としているのも事実である。今更何をと言われそうだが、残りの人生の生き方が少しは見えてきたような気がします。

諸先輩の皆様、そして私を支えてくれた仲間、これまで私に生きてゆく方向を示して下さい下さった皆様に深く御礼申し上げます。

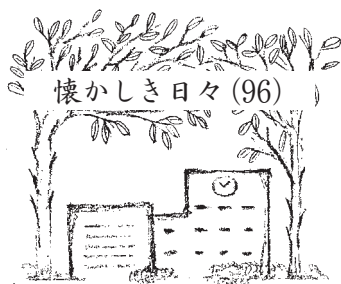
## 勲章を付けて一つの区切りかと

虚実の観るぬ終章へ向かう

ありがとうございました。



理事長を務める公益財団法人長寿科学振興財団のスタッフと



## 凡庸な学生に指針を 与えてくれた基礎医学セミナー

名古屋大学大学院医学系 腫瘍病理学

えのもと  
榎本

あつし  
篤



平成10年に名大医学部を卒業してから早25年になる。名大病院病理部の先代教授の中村栄男先生にリンパ腫の診断コンサルテーションに伺うと、顕微鏡ステージにスライドを置くやいなや、「先生、人生は短い！」とよくおっしゃっていたが（私は心の中で「それより標本をしっかりとみて下さい…」とつぶやいていた）、最近はそのお気持ちがとてもわかるようになった。なんとか良い仕事を、と思って日々頑張っているつもりだが、あっという間に時間が過ぎるので何ともならない。

医学部に入学時、周囲の同級生のスペックの高さにうろたえたことをよく覚えている。不真面目だったと言う割には医学部に合格している、スポーツだけでなく、なんと音楽もできる、高尚な趣味があり、英語もできる…中学、高校と勉強と部活動しかしてこなかった（ただし田舎ではすごく輝いていた）自分があまりに凡庸にみえ、なんとかせなあかん、と思ってはいたが、ご多分にもれず、バイト、講義、部活という普通の学生生活で3年が過ぎた（楽しい学生生活で、友人にはとても恵まれた）。

転機が訪れたのは4年生の基礎医学セミナーで、私は吉開泰信教授の生体防御研究部門を選んだのだが、そこで指導教員の西村仁志先生から厳しい指導を受けたことであった。「試薬の場所は一度教えたら二度と教えない」など、とても厳しい指導方針で、当初は大変苦勞した。一方、吉開教授も西村先生も、私をお客さんではなく研究者（戦力）としてみてくれており、ある時、吉開教授から「榎本君も今のデータで論文書いて」と普通に言われ、「??？」と困惑したことを覚えている。大学院生の先生方の合コン（おそらく死語）には要員として何度か招集され、スキーや食事にも連れて行ってもらった。先生方の引っ越しがあると実家の軽トラックを出すように命じられた。この文武両道感はそれまでの人生で感じたことのない感覚で、結局6年生の最後まで研究室に出入りすることとなった。夜中まで実験をして家に帰れなくなった時は勝手に教授室のソファで寝たこともあった。朝、吉開教授が入ってこられて「おう、おはよう。がんばってるなあ」とはおっしゃったが、決して怒られることはなかった。福岡で開催された免疫学会でポスター発

表する機会をいただいた時、高名な先生を会場で見つけ、恐れ多くも自分のポスターの前までお連れしてデータを見て頂いたこともある。お褒めの言葉をいただき、自分が学問に関わっている気がしてとても嬉しかったのを覚えている（ちなみにその夜、中洲のカプセルホテルですりにあって一文無しになった）。

6年生まで実験に打ち込んだ学生時代だったが、卒業時は「こんなに苦勞が多くて結果のでない研究はもういやだ…臨床医を目指そう」と決意して、当時忙しいことで有名な大垣市民病院での研修を希望した。素晴らしい先生と同期に恵まれて充実した研修医生活をすごし、そして医師は人から感謝されるとてもやりがいのある職業であると確信した。一方、臨床はどうしても時間の使い方を自身の裁量で決められないことも多く、私にとってはそこがフラストレーションでもあった。分院腎臓内科（丹羽利充先生）へとすすみ、大学院は腎臓生理学を学位論文の研究テーマとした。あれほど、もういやだなと思っていた研究がやはり面白い、と感じるようになり、その後は、高橋雅英教授の腫瘍病理学教室にポスドクとして参画し、神経発生や血管新生のテーマに取り組んだ。加えて、高橋教授のお誘いのご指導をいただいて病理医の道を歩むこととなった。

思い起こすと、6年生まで続けた研究でそのつらさを経験しなければ、臨床のつらさと天秤にかけることすらできず、そういった意味で基礎医学セミナーは平凡な学生であった私に進路を考える重要な指針を与えてくれたと感謝している。あれからあっという間に時間が過ぎ、今は学生に指針を与えなくてはいけない立場にいるが、自身の今後の指針すらままならない未熟な自分にはそれが難しい。冒頭に述べた中村先生は、「人生は短いからどうせよ」とはおっしゃらなかった。また中村先生をはじめ学友会の諸先輩方に一献傾けながらでもご教示いただければと願っている。



## 軟式庭球部の思い出

名古屋大学大学院医学系研究科 消化器内科学

かわしま ひろき  
川嶋 啓揮



卒業して30年近くたちこんな原稿を書く年齢になったのかと思ひながら、この寄稿を引き受けました。さて何を書こうかしらと考えると他人様に自慢できるような思い出がないことに気が付きました。正直に自分の学生生活を書いてしまうと、現在教員として講義や臨床実習をしている立場が危うくなりそうです。そこで令和4年11月に有馬寛先生（昭和63年卒）から引き継いで部長を拝命したこともあり、ソフトテニス部での思い出を書かせていただきます。実名を挙げるか悩みましたが挙げてしまいます。許可なく登場していただく先生方、ご容赦ください。

ソフトテニスという競技は、自分の学生時代には軟式庭球と言われておりました。卒業後にルール変更があり、国際化を目指す（今でもかもしかかもしれませんが、軟式庭球は東アジアのみにしか普及していませんでした）ためにソフトテニスになったという歴史があります。今のソフトテニス部は西医体優勝するような（おめでとうございませう！）強く活気にあふれた部活ですが、当時の軟式庭球部は30人にも満たないこぢんまりとした部活で（これはこれでよかったです）、宴会には毎回、伊藤基先生（昭和31年卒）と星野洗先生（昭和32年卒）が出席してください、学生時代の思い出など人生訓話的な同じ話を何回も聴かせていただきました。最近はずすがに出席いただけず寂しい限りです。

当時の部長は中尾昭公先生（昭和48年卒）でした。当時から目力と勢いがすごく、実習で中尾先生の外科に行ったときなどよく飲み連れて行っていただきました。さんざん飲ませていただき、帰りのタクシーの中で嘔吐、奥様の車で外科の医局まで送ってもらい、朝起きたときにはどうして自分が医局にいるのかわからないということもございました。中尾先生には外科と内科の違いはありますが、同じ臓器を扱う関係で現在でも大変お世話になっております。そのお陰で消化器業界では川嶋のタクシー嘔吐事件は結構有名な逸話になってしまっています。先輩の藤本保志先生（平成2年卒）、同期の小林光一先生、三井崇先生、後輩の今釜史郎先生（平成9年卒）、村田寛明先生（平成10年卒）などとペアで試合に出ていました（軟式庭球にはシングルはございません）。名古屋に出てきたばかりの田舎者で酔った自分

を藤本先生は暗い夜道に放置してくれました。鶴舞祭のビールパーティーで今釜先生に頭からビールをかけて怒られたこともありましたが（ごめんなさい）。村田先生は全医体チャンピオンという輝かしい経歴の持ち主で、真摯な姿勢を見習ったものです。低学年時の自分は、練習もろくにしないヘタレで重要なポイントの時に緊張してよくミスをし、冷たい視線を感じたものです。学年が上がり幹部をするようになり、それなりにまじめに練習をするようになってから、練習量を背景として自分に“大丈夫”という暗示をかける術を身に着けました。そのおかげか東海医歯薬で団体優勝したり全医体に個人で出場もできました。この自己暗示は現在でも内視鏡治療など行っているときに役に立っています。誰がみてもやばい状況のなかで冷静を装い（バレているかもしれませんが）、善後策を考えながらテニスでの緊張するポイントでのレシーブ待ちのときのことなど思い出し、“大丈夫”と自分に言い聞かせております。

私にとって部活のつながりは宝物です。診療科を越えて先輩にはかわいがってもらい、後輩には仕事を頼みやすく信頼もできます。10人以上の後輩が消化器内科で活躍してくれていることも部活のつながりのお陰だと思っております。ソフトテニス部のOB・OGの先生方、現役部員は頑張っておりますので宴会などは是非参加ください。皆様と思い出話をしたり、新たなOB間のつながりが出来るのを楽しみにしています！最初から最後まで宴会の話になってしまいました。自分の思い出などこんなものです。



ソフトテニス部 部長交代

# YLP 医療行政修士コースの20周年記念について

いとう かつき  
名古屋大学参与 名誉教授 伊藤 勝基



令和5年12月4日に上記20周年記念式典・祝賀会が、千種区のホテルメルパルク名古屋で行われました。式典行事の報告の前に、YLP 修士医療行政コースについて解説させていただきます。このコースが発足したのは、小泉内閣の時で、当時世界第2位のODA資金(2000年には世界第1位の105億ドル/年)を、多くの発展途上国のため支援に使っていた頃です。国連の安全保障理事国の常任理事国に日本がドイツ、ブラジルとともに立候補して、総会の2/3の決議で決定される予定であったのが、それら多くの発展途上国の賛同が得られず、否決されました。賛成票でなく棄権票を入れるには、いろいろ事情があるのでしょうか、高価な贈り物をすれば味方になるという考えは、大いに反省すべきです。小生がNY医科大学の外科の臨床教授をしていた時、ペルトリコから来ていた同僚のG.S.Ramiretz教授が、アメリカがペルトリコからの援助に、多額の食券を与えたのを見て、国の発展をわざわざ阻害する援助をしていると言い、非常に怒っていたのを見た古い話を思い出しました。人に援助をする時、直接魚を与えるのではなく、魚の釣り方、捕り方を教えるべきであると話し、強く彼に同意したのを記憶しています。その直後、日本の経済はバブルがはじけ、ひどい落ち込みが生じ、当時すでに500兆円もの国債残高(2022年現在1,105兆円)を有し、従来通りのダム建設や、道路建設といった高額な支援がためらわれることとなり、金の少なくて済む技術支援や人材育成支援に方向転換されました。いろいろ意見はあるでしょうが小生は大賛成です。世界の先端を争う研究が主目的である大学は、研究以外の国際協力とか、人材育成であるとか、政治的目的のために事業に加担することに、少し抵抗もあったようです。従来からの留学生受け入れ制度が、研究をするといった、政治的には全く無目的で、結果を求めず、奨学金だけを出すという制度の中に、特別に、ごく近い将来すぐに、日本と友好関係を創れるような、国家中枢の人材育成のコースを立ち上げることとなりました。これがYLP 修士コースで2001年に発足させることとなりました。政策研究大学院大学が一般行政部門、一橋大学がビジネス部門、九州大学が司法行政部門を受け持つことになりました。文科省の斉藤和信課長の呼びかけに、当時の勝又義直医学部研究科長、松尾稔名大総長が呼応する形で、2年遅れて、名古屋大学が医療行政部門を、神戸大学が地方行政部門を受け持つ、参加することになりました。設立のための準備期間を含む設立までの数年間、発展途上国の司法行政部門援助プログラムを行っていた名古屋大学法学部の先生方、特に、鮎京正訓教授と市橋克哉教授にはお世話になり、この場を借りて感謝を申し上げます。研究大学である名古屋大学で、その基盤となる研究論文、この場合修士論文の質を落とさず、できるだけインパクトファクターのある雑誌に投稿させるよう努力しております。2代目の教授は、それまで京都大学で教授をしていた坂本純一教授、3代目は、それまで数年間本学の予防医学の教授であった濱嶋信之教授、4代目の教授は、本学産婦人科で絨膜癌の多くの論文を書いている山本英子教授であります。結果として、それら研究論文の成果を出しております。さらに10年ほど前から濱口道成名古屋大学総長の決断で、YLPの医療行政部門に、アジア諸国の国家中枢人材養成プログラム PhD コースを新たに、名古屋大学の中に立ち上げました。いったん国に帰ったYLP 修了生が、さらにPhDを取得することにより、母国の省庁で昇進し、中心で活躍できるようになったらいいという思いがありました。実際に結果として、厚生大臣や、事務次官、局長といった政府の高官が多く出るようになりました。

メルパルクホテルでの式典は令和5年12月4日午後2時から始まり、大学院医学系研究科医療行政学 YLP 医療行政修士コースの山本英子教授の開会の辞に続き、来賓祝辞が、文部科学省、大臣官房審議官：西條正明氏、外務省、大臣官房人物交流室：渡邊慎二室長、厚生労働省、大臣官房厚生科学課：伯野春彦課長代理青木史子氏からあり、当大学側から、杉山直総長、東海国立大学機構、松尾清一機構長、医学部研究科、木村宏研究科長とあり、それに続き、政策研究大学院大学、高田寛文副学長が、「YLPの役割」という演題で話しがなされ、「名古屋大学 YLPの歩み」という題で、小生(初代教授)が、話しをさせていただきました。初代 YLP 卒業生の2名に「海外から見た YLPへの期待」という演題にて、話しをさせていただきました。ラオス保健大臣 Bounfeng Phoummalaysith、

とアジア開発銀行、社会セクター上級官、Altantuya Jigjidsuren です。

記念写真撮影後、記念祝賀会が行われ、YLP3代目教授、濱嶋信之名古屋大学名誉教授、山内章アジアサテライトキャンパス学院長、カンボジア保健省 Touch Sokneang 人事開発部部長の祝辞があり、乾杯の挨拶を、前研究科長の門松健治名古屋大学副総長にいただきました。YLP 卒業生が200名ほどになった今、50名以上の参加を得て、実に盛況でした。懐かしさの中で抱き合う姿も多く、話が弾んでいました。午後7時ごろ西野公博医療行政学准教授の閉会の辞で終了となりました。

翌日12月5日会場を医学部基礎研究棟の会議室に移し、YLP 卒業生のシンポジウムを行いました。20年の経過は、単に彼らが歳をとって、部内で昇進したということだけでなく、非常に素晴らしい仕事をしているのだということを知り、感激し涙しました。特にカンボジアの Touch Sokneang 保健省人事開発部部長の小生と目を合わせながらの発表は、素晴らしいものでした。ここ数年の同国の医療資料、周産期死亡、小児死亡率、その他の有病率等、23年前に小生がカンボジアを訪問した時は、知ることもできなかったそれらのデータは、WHO や JICA の支援チームの出す不完全な参考データであったものが、自分たちの手で、しっかりと構築された厚生省保健システムの中から出されているものであるのが分り、感激しました。ポルポト派に、多くの知識人が殺され、大学の先生も、医師も多く殺され、医療はまさに砂漠状態でした。今彼らが頑張って、素晴らしいシステムを作り、そこから出てきている医療成績は、もはや発展途上国のものではなく、先進国の仲間入りをしたことを示すものであり、授業で教えたことが、多く取り入れられ、一気に近代の医療制度が構築されたという感じです。このプログラムを始めてよかったと思えた瞬間でした。モンゴル、キルギス、ミャンマー、インドネシア、ウズベキスタンの各国を代表する発表があり、聞いて、大いに喜びを感じるものでした。医療制度は、国が作らねばならない極めて重要な施策の一つであり、彼ら卒業生が正直に地道に働いているおかげで、安心できる健康な国が作られ、発展途上国が貧困からうまく抜け出し、平和な国家の設立に貢献出来たら幸せであり、それがこのプログラムの輝かしい成果であると考えます。

同じ日12月5日夕方、東山の豊田講堂の裏のユニバーサルクラブレストランで、卒業生の懇親会が開かれました。家族を連れてきた方も多く、父親、母親、婿、娘など様々でありました。歴代のこれらの生徒と多くの時間を過ごした名大側のコーディネーターの人たち、事務職員の方々、教官たち、あちこちで、抱き合う姿も多く、思い出は尽きなかったようでした。

ここまでいろいろ設立から、20年の経過の中で、非常に多くの経済的援助(特に、アルフレッサ元会長 横井太様、篠田守正様、十時博様、佐々良次先生方)、授業協力援助、多く行事の支援をいただいた皆様には、感謝しなければならないことが尽きません。この場を借りて御礼を申し上げます。コロナ感染症のため、3年以上にわたり、海外交流が制限され、優秀な YLP 候補者の応募が僅かに少なくなっておりましたが、何とか新たな年に向かい、再編拡大してゆきたいと考えています。今後さらさら一層のご支援のほど、よろしく願いたします。



The 20th anniversary of Young Leader's Program at Nagoya University December 4, 2023 at Hotel Mielparque

随筆

## 50年前の名大医学部 学生時代の記憶をたどって

静岡県立静岡がんセンター 参与兼放射線・陽子線治療センター長

にしむら  
西村てつお  
哲夫

(昭和50年卒)



私は名大卒業後、名古屋を出て浜松に来ました。そのまま縁があって創立間もない浜松医大放射線科に入局しました。教授は名大昭和33年卒の金子昌生先生、副学長・病院長は名大放射線科教授だった高橋信次先生でした。高橋先生は放射線医学に大きな業績を残され、文化勲章を受章された方です。私はその後2002年に開設された静岡がんセンターに異動し、今は非常勤の身分となりましたが、放射線治療の仕事を行っています。

さて2023年11月に名大友会静岡県支部総会で、放射線治療について話をする機会がありました。静岡県出身の名大生の出席もあり少し張り切りました。高橋先生が1960年頃に名大で始めた原体(げんたい)照射法について述べて、現在までの放射線治療の発展を話しました。また浜松医大に残されていた写真で、1974年の高橋先生の最終講義の様子も紹介しました(写真1、2)。

この時、招請講演の演者であった時報部長梶山教授から、私に在学中当時のことを書くようにとお話をいただきました。私はもうすぐ卒業50年を迎えます。学生時代の個人的な思い出ではありますが、お伝えすることも役割と思い投稿させていただくことにしました。

さて私たちが名大に入学した1969年は全国的に学生運動がピークに達し、東大は入学試験が中止になりました。全国の多くの大学では機動隊に守られて入試が行われた中、名大の入試は全く平穏でした。しかし平穏な日々は続きませんでした。入学後、講義室にはアジ演説をぶつ先輩学生が入ってきました。5月には学長の辞任、教養部や本部の封鎖、授業の中断、工学部の古い木造校舎での授業再開、そして12月の機動隊導入で封鎖解除。1969年の名大には色々なことが次々とありました。

一方で医学部は教授選考の問題に端を発した混乱が続いていました。私たちが東山から鶴舞キャンパスに移った1971年には教授の定数は半分も充足されていませんでした。しかし、ようやく薬理学、脳外科学の教授が着任され復興の兆しが見えた頃で、教授不在の講座にあっても学生教育に混乱を感じることはありませんでした。

当時の講義はプリントの配布もありましたが、多くは板書またはスライドの投影でした。その中でいくつか思い出す講義があります。これぞ医学部教授であることを思わせたのは、法医学の古田莞爾先生。古田先生は書くだけで、書かれた文字は絶妙のタイミングで教授の横にいる男性職員が消して行きました。第2解剖の山田和順(かずより)先生の板書は超特急でした。右手にチョーク左手に黒板消しを持って、こちらが書き終わる前に次の板書が始まり、ノートは追いつけないままでした。第二外科近藤達平先生の講義は、中央に座りご自分のノートを読み上げるもので、

学生はひたすら聴きとってノートに書きました。しかし不思議にノートは形になっていました。但し近藤先生オリジナルの胃全摘術6字型再建の説明にはさすがに黒板が使われました。

戦争時代の話も語られました。戦艦大和に配属になった第1内科祖父江逸郎先生。その戦争体験はNHKアーカイブの「大和に乗り組んだ軍医」で今も視聴できます。学生時代に名大医学部の空襲で下肢に重傷を負った際に切断を恐れ、二つの外科(斎藤外科、桐原外科)の内、連れて行ってほしくない科名を叫んだと、ご自分のつらい体験を語った無菌動物永田育也先生。当時の学生の利根的な心情を中村遊郭から鶴舞に通った体験を通して述べた皮膚科小林敏夫先生などなど。

第1内科山田一正先生は講義室に患者さんを連れてきて、私たちの前で骨髄穿刺を見せてくれました。戦後早い時期の米国留学など多くを私たちに語りました。細菌学の加藤延夫先生は医学部の混乱の中、教官の居なくなった講座を支えるために留学中のドイツから帰国することになった経緯を語りました。



写真1 最終講義の高橋信次先生 1974年9月

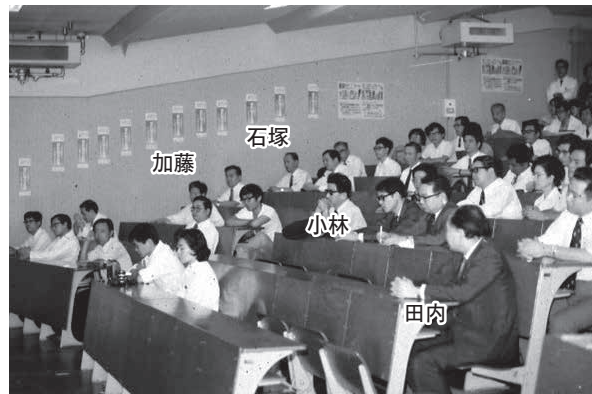


写真2 最終講義の様子、壁の張り紙は当たり前の光景でした。(後の学長石塚直隆先生、後の総長加藤延夫先生、皮膚科教授小林敏夫先生、学部長の田内久先生も出席されています。)

講義への学生の出席者は20-30人でした。後年浜松医大で講義を担当した際の出席者は約50人でした。何と大勢の学生がいるかと思いましたが、考えてみたら名大が少なすぎただけでした。出席が取られることは殆どなかった中で、産婦人科石塚直隆先生は初回の講義で出席を取り、教室内には緊張が走りました。しかし2回目は前回の欠席者限定の出席確認になり、教室内の緊張が緩みました。

ある時中日新聞に1つの記事が載りました。愛知県がんセンター赤崎兼義研究所長がN大学医学部で講義するのに、勉強をし直して準備万端出かけたものの、余りの学生の出席の悪さに失望し、それ以降の講義は断ったというものでした。赤崎先生は当時の悪性リンパ腫赤崎分類で知られる著名な病理学者です。しかしN大学の学生はそのことを誰も知りませんでした。私は遅れて出席したのですが、出席者は10名程度でした。当時は土曜日にも講義があり、余計少なかったと思います。翌週の講義はキャンセルになりましたが、記事が出てその理由が分かりました。

後年この話のある病理医にしたことがあります。赤崎先生は学会会場のポスター発表にも丁寧に通す、大変几帳面な方とのことでした。病理学の田内久先生は我々に対して、大変残念なことだとおっしゃっただけで、学生のことを叱ることはありませんでした。しかし赤崎先生にどのように説明されたかは知る由もありませんでした。

講義はさておき、実習は皆ちゃんと出席しました。しかし思い出すと、今は考えられないこともありました。解剖実習は素手で行ったのです。指にホルマリンのにおいが染みわたるのが気になりましたが、素手の実習を特に疑問には思っていませんでした。また婦人科の外実習では内診は素手で行いました。手袋は手術処置を行う際に、患者を守るためにあり、医療者や学生を守るためのものという考えはなかったのかも知れません。

内容が印象的な講義もいくつか思い出しました。従来松果体腫は胚細胞由来という広い疾患概念であること述べた脳外科景山直樹先生、スチューデントアパシーを話した精神科笠原嘉先生など、新任教授の話には新しい流れと説得力を感じました。私の横にいたH君は笠原先生の話聴いて「すげえ」とつぶやき、精神科の道に進みました。また第3内科坂本信夫先生の糖代謝と脂質代謝の関係についての明瞭な講義はそれまでの自分のもやもやした理解を晴らすものでした。

当時は今のように学生から教官にベスト講義賞などの賞を差し上げる伝統はなかったのですが、私たちの学年はごく自然に小林敏夫先生と山田一正先生に花束を贈呈しました。

卒業前の学士試験は最終学年の9月の口腔外科に始まり、2月初めの内科まで延々と続くものでした。当時医師国家試験は4月になって行われました。その前年頃にマルチプルチョイス方式が始まって間もない頃で、名大の学士試験はまだ記述式でした。あらかじめ山ほどの問題が学生に提示され、その中から5題程度が出題されるものでした。ちなみに手元に残っている放射線科の資料を見ると、

約60-70題が事前に配られ、5題が出題されました(写真3)。この試験問題はCTが日本に導入される前年のものでした。

試験は金曜日の午後行われます。試験が終わった夕方は、息抜きのコンパ。翌日からは、次の試験の準備、翌週には回答案を当時よく使われた青焼きに複写して勉強会。それを覚えて本番に臨みました。

卒後の進路は、当時始まった名大方式が一般化していました。講義室に募集の張り紙が並びました。各関連病院の病院長が出席され、その話を聴く機会がありました。病院長の中には、戦後何もない時期から強いリーダーシップで各病院を発展させた方も少なくありませんでした。特に静岡済生会総合病院の初代院長の岡本一男先生は「ギャング」と呼ばれる、学生にも有名な方で、迫力満点でした。当時は強力な個性で名大の関連病院を引っ張って行かれた方が多かったという印象を持ちました。

今から思うと、私たちが名大医学部の学生時代は、講義の出席も研修病院の決め方も学生運動に参加も「自由」でした。教官の多くは、何らかの形で戦争を体験した世代の方々で、自由が大きく制限された自分たちの代わりに、自然に私たちに自由を与えていただいたのかも知れません。

今回この原稿を書きながら、当時に戻って、講義室に入ることを想像してみました。小林敏夫先生の青春を語った講義や山田和順先生、近藤達平先生のユニークな講義をもう一度聴くことを想像するとわくわくしてきました。

今回当時の記憶をたどりながら、2人の同級生の助けを借りて、裏付けとなる資料がある場合はそれを参考にして、この文を作りました。誤りがないように留意したつもりですが、間違いがあったかも知れません。また登場された先生方も実名にしました。失礼な点があったかも知れませんが、50年前のこととしてどうかご容赦ください。

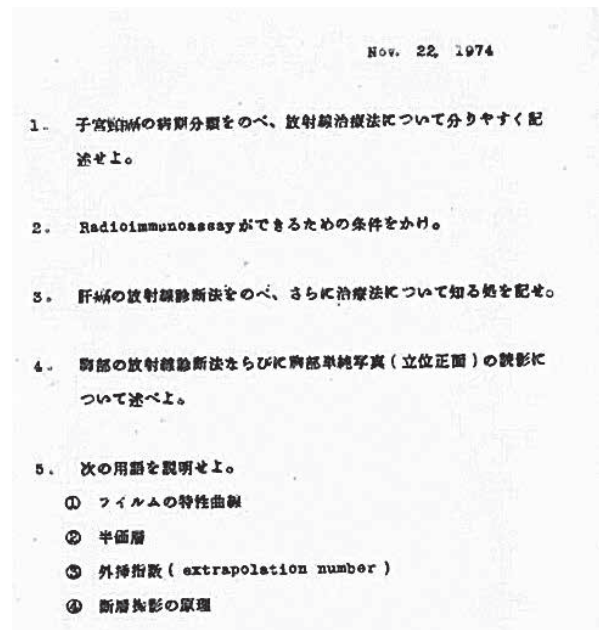


写真3 青焼きの放射線科試験問題